

理学療法において物理療法は、理学療法士の法制度からみても、「理学」の語源的な意味からみても、運動療法とともに大きなウエイトを占めてきた。しかし近年、物理療法に関する臨床活動や研究、卒前・卒後教育などが停滞傾向にあることは否めず、臨床場面における物理療法が理学療法士の手から離れ、アスリート関係などの他領域のものになるのではないかという危機感を抱くようになっていく。そこで本特集は、物理療法を取り巻く現況と課題を浮き彫りにし、物理療法を再興するための方略を提示することを目的に企画した。

■物理療法の臨床適応の課題と方略（高岡克宜，他論文）

臨床においてわれわれ、理学療法士が物理療法を十分活用できているかどうか疑問を感じる場面が多くみられる。また、臨床で働く理学療法士が物理療法をどのようにとらえ治療に役立てているか不明な点が多い上、臨床での物理療法の使用頻度や使用状況について調査を行った報告は非常に少ない。筆者は物理療法の現況をさらに詳しく把握するため、臨床で働く現職の理学療法士に対して物理療法に関するアンケート調査を行い、臨床における物理療法の実態を調査した。本稿ではその結果を中心に、今後の臨床における物理療法の課題と方略について述べる。

■物理療法における研究活動の課題と方略（庄本康治論文）

物理療法は単独で使用する治療ではなく、運動療法などの他の治療と組み合わせて実施すべき治療であるが、本邦においては積極的に使用、研究されていない現状がある。本稿では、脳血管障害、脊髄損傷等に対する電気療法、内部障害に対する電気療法、鎮痛に対する電気療法、整形外科疾患に対する電気療法などの物理療法先行研究について論述し、今後の物理療法研究の課題と進め方について論述した。

■物理療法の卒前・卒後教育の課題と方略（菅原 仁論文）

物理療法は、温熱、寒冷、電気、力を利用するため、多くの疾患や障害に適応となるが、現在、臨床で有効的に利用されていない状況がある。この背景には、物理療法の科学的根拠が不足していることが挙げられるが、卒前・卒後教育の見直しも必要であり、いくつかの課題がある。そこで、物理療法の有効的な利用を促すための卒前・卒後教育の方略について述べる。

■スポーツ傷害の靱帯損傷に対する物理療法の臨床適応と効果（安藤貴之論文）

スポーツ現場での靱帯損傷に対する物理療法に焦点をあてその適応について考察した。物理療法は炎症症状の軽減や組織の修復を促し、軟部組織の修復過程を短縮させる手段として有用である。また筋機能の改善にも影響を及ぼし運動療法の一助としても活用できる。スポーツ現場は時間が問われる世界であり、長期的にも短期的にもその効果を反映させることが可能である物理療法は、競技成績へも影響力を及ぼすものであると考える。

■糖尿病患者に対する低周波電気刺激療法の臨床適応と効果（上野将之，他論文）

近年、理学療法士の物理療法離れが懸念され、また多くの施設にはホットパックや低周波装置が存在しているにもかかわらず使用頻度は減っている。物理療法は時に絶大な効果をもたらすことがあり、この治療手段を理学療法士自ら手放すのは遺憾である。そこで今回、多くの施設に既存する低周波装置を用い、新しい物理療法の確立を目指すために骨格筋へ低周波刺激を行い、血糖上昇抑制効果を検討したので報告する。

■とびらページの作品について：作品紹介(p665)

青木千恵子氏「ひまわりの花」

夏の暑さに負けず、強くたくましく伸びるひまわり。花は丸く大きく開き、見る人に元気を届けてくれることを、ひまわりから教わりました。ちぎり絵は、手にする和紙のぬくもりを感じることができ楽しいひとときです。

